東教育財団だより

発行所
公益財団法人
東教育財団
大阪市中央区南本町
２丁目２番１１号
堺筋本町西尾ビル６階
電話06（6262）7363
発行責任者　宍倉忠夫

令和六年度に助成した事業を紹介します

東教育財団では、大阪市中央区内の学校教育並びに社会教育の育成と地域文化の振興に寄与するため、学校教育活動並びに社会教育団体等が行う社会教育活動、生涯学習活動及び地域文化・まちづくり活動に助成を行っています。

令和六年度は、昨年四月の助成決定のとおり、七八件、総額一、三五五万円の助成を行いました。

助成金の種別ごとの助成件数・金額、助成対象事業の具体例は次のとおりです。

学校教育事業助成

中央区内の幼稚園、小学校及び中学校に対して、二〇件、総額四五〇万円の助成を行いました。

「多様な体験を通して　豊かな心をはぐくむ行事活動」

「人形劇鑑賞会風景」

銅座幼稚園では、幼児に多様な体験の機会を与えるために、茶道の指導やパステル画の指導を受けるほか、人形劇団『クラルテ』さんによる人形劇鑑賞会も実施しました。これらの事業を実施する中で、様々な活動を体験することで感性や表現方法が豊かになったほか、幼児一人ひとりが安心して幼稚園生活を過ごす姿につながりました。

（助成額一八万五千円）

「多文化共生をめざす学校づくり　授業～ＥＳＤの実践を通して～」

南小学校では、外国につながる児童が多数在籍していることから、「みなみＥＳＤカリキュラム」という独自の取組みによる多文化共生教育の実施や平和教育の推進における、平和への願いについての学習をすすめることにより、平和への願いを自分事として考えることができるようになりました。また、図書室の整備・改善により、世界の言語に親しむことができる多種多様な図書をそろえることができました。

「語り部から戦争体験を聞く平和教育風景」

（助成額二〇万円）

「伝統文化の学習及び　学力向上推進事業」

「雅楽鑑賞風景」

中央小学校では、伝統文化の学習において、雅楽奏者による演奏会・交流会を実施し、日本の伝統的な音楽に触れ、雅楽について学ぶことで雅楽に親しむことができました。また、漢字学習の定着を図る契機にするとともに、家庭での自主学習時間を自分で確保し学ぶことにつなげることができました。

（助成額三〇万円）

社会教育事業助成

社会教育団体に対して、一〇件、総額一九五万円の助成を行いました。

「子どもの健全育成および環境整備事業」

中央区子ども会育成連合協議会においては、キックベースボールやソフトボールの競技大会を通じて、こどもたちが協調性や礼儀を身に付けるとともに、こどもたちの交流と健全育成を図ることができました。また、中央区子ども大会では、趣向を凝らした競技で、地域のこどもたちが、小学校下の枠を超えて交流の輪を育み、健全な心身を作ることができました。トランペット鼓隊では、音楽に親しみ、文化的教養を身に付けるとともに、活動を通じて仲間と指導者との信頼関係に基づくコミュニティの育成を育むこともできました。

（助成額四〇万円）

「区内青年層の情報交換と交流を推進する事業」

中央区青年団体協議会では、区民まつりにおいてフリーマーケットを行い、ＳＤＧｓの観点から、リサイクル・リユースを区民向けに啓発し、各ブースの人と人とのふれあいを通して、地域コミュニティの活性化に寄与することができました。青年会員を対象とした研修会や中央区盆おどり大会での総踊りなどの活動では、地域活性化や青少年育成活動の活性化、区民の連帯感とわが町意識の高揚に寄与することができました。

（助成額四〇万円）

生涯学習事業助成

生涯学習団体に対して、五件、総額五〇万円の助成を行いました。

「南小学校生涯学習ルーム事業」

南小学校生涯学習ルームでは、地域住民の生涯学習や交流を目的とした講座やキッズダンス教室等を開催しました。舞台発表等の機会が交流や生活の張りにつながるとともに、このような機会を増やすことで、こどもたちの意欲を高めることにつながりました。また、読み聞かせボランティアによるお話会の実施後は、次回開催の問い合わせや、同じ本を図書館で探すなどの行動につながるなど、児童の読書活動のきっかけづくりとなりました。

「キッズダンス教室の皆さんによるパフォーマンス」

（助成額一〇万円）

地域文化事業助成

中央区内の地域文化の振興に寄与する事業を行う団体に対して、二八件、総額二六〇万円の助成を行いました。

「子供獅子教室」

いくたま子供獅子保存会では、上町台地に伝わる「子供獅子」の文化をこどもたちが学ぶことで、その伝承と保存を図るとともに、地域文化の後継者を育成する事業を行っています。「子供獅子」は、地域に根付く伝統文化であり、本教室を通して次の世代へその伝承と保存を受

け継ぐことができました。また、恒例活動として、保護者や地域住民との交流の機会を作ることもできました。（助成額十二万円）

「科学教室（磁石の勉強と磁石を利用した工作作り）」

大阪市シルバーアドバイザー連絡協議会では、中央区のこどもたちに科学教室の授業を通して「磁石」の働きの理解を深め、創造的な化学能力の開発を行いました。「磁石」の働きを通して、自ら科学に興味を持ち、論理的な思考力を身に付けたり、創造力豊かなこどもになれるよう注力し取り組んでおり、私たちの活動が、学校教育以外の立場で世代間交流していくことで、お役に立てることを望んでいます。（助成額八万円）

「磁石の働きを学べる“キツツキのおもちゃ”を工作中」

「たそがれコンサートＷｅｅｋ」

北大江地区まちづくり実行委員会・北大江たそがれコンサート実行委員会では、中央区で住み、働き、学び、訪れる人々に、身近な場所で都心生活の文化・芸術的な楽しみを提供するとともに、まちの魅力を広く情報発信するため、「たそがれコンサートＷｅｅｋ」と題して、野外コンサートや地域一帯に文化・芸術的交流の輪が広がる週間イベント、楽器体験レッスンによる芸術文化の担い手育成のプログラムも実施しました。この事業を通じて、身近なまちの魅力を再認識するとともに、相互の交流を深め、都心のコミュニティづくりに寄与しました。（助成額十二万円）

「北大江公園ライブ風景」

地域まちづくり事業助成

中央区内の地域まちづくりの振興に寄与する事業を行う団体に対して、一五件、総額二〇〇万円の助成を行いました。

「第五六回中大江校下盆踊り大会」

中大江校下盆踊り大会実行委員会は、盆踊りの開催を通じて、地域住民の和を図りコミュニティの育成及び住みよい町づくりに寄与することをめざしています。初日は、豪雨により中止となりましたが、翌日は天候に恵まれ、例年以上の二、〇〇〇人を超える参加がありました。校下にあるダンススクールのこどもたちによるストリートダンスの披露や万博音頭を踊るなどし、会場全体が盛り上がり、地域住民と在勤者とのコミュニケーションを深めるとともに、こどもたちや青少年の健全育成、新旧住民の交流と地域のふれあいに貢献することができました。（助成額一五万円）

適塾と合水堂

―口もきかない？いえいえ実は仲が良かった？―

元 大阪市教育委員会 文化財保護課長
植木 久

至近距離にあった適塾と合水堂

中央区北浜三丁目に「適塾（適々斎塾）」がある。天保九年（一八三八）に緒方洪庵が開いた蘭学の私塾で、数多くの俊英が集まり、人材の養成がなされた。その中から福沢諭吉、大鳥圭介、大村益次郎、佐野常民といった多くの明治維新の立役者を輩出したことはあまりにも有名である。敷地は〝緒方洪庵旧宅および塾〟として昭和一六年（一九四一）、国の史跡に指定された。また建物も大阪中心部に残る江戸時代の町屋建築としてほとんど唯一の遺構であり、そして言うまでもなく緒方洪庵の私塾として貴重であることから、昭和三九年（一九六四）、重要文化財に指定された。

一方、そこから北東方向に三〇〇mほど離れた場所に「合水堂」という医学塾があったことはあまり知られていない。梅檀木橋を渡った北側、現在大阪市中央公会堂の建つあたりである。紀州和歌山の医師、華岡青洲（一七六〇～一八三五）は有吉佐和子の小説『華岡青洲の妻』でも有名である。全身麻酔薬「通仙散」を開発し、世界で初めて全身麻酔による乳がんの手術に成功した。青洲は地元で「春林軒」という医学塾兼病院を開いた。入門希望者は多くあったが、和歌山の地は遠方であり、青洲は長男であったことから和歌山を離れることができなかったため、末弟の華岡鹿城（一七七九～一八二七）が文化十三年（一八一六）、地理的に便利な大阪市中之島の地に、「春林軒」の分塾として「合水堂」を開いた。名前の由来は、論語の「知者は水を楽しむ」によるという。（そのため後に「楽水堂」に改名された。）塾生には華岡流外科の高度な最先端知識や医療技術が教授された。鹿城をはじめその後を継いだ青洲の養子の南洋や鹿城の子である積軒が、当時の医師番付の上位に名を連ねていることからも、「合水堂」が高く評価されていたことがわかる。華岡流外科門人録によると門弟は全国から集まり、一七八〇～一八八二の間に、総勢二二〇〇人にものぼり、そのうちの半数が「合水堂」で学んだ。

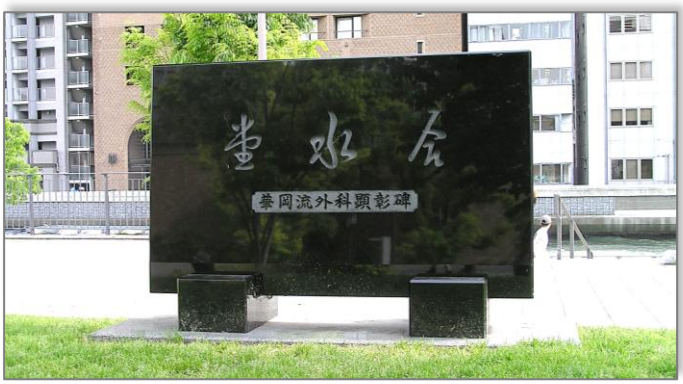
両塾生は仲が悪かった？

ところでこの「合水堂」と「適塾」は土佐堀川をはさんで至近距離にあり、同様に医学塾であったため、両塾生はライバル意識が強く、福沢諭吉の『福翁自伝』によると「毎度往来に出逢うて、もとより言葉も交えず、互いに睨み合うて行違う」という状況であったという。「合水堂」の塾生は地方の医者などの子弟が多く、苦学生が多かった適塾生に比して裕福であり、身なりも整っていたといったことからくる対抗意識ともとれる。

ただし、この記述はやや大袈裟な表現のようであり、両塾の門人録を調査したところ、適塾生として有名な橋本佐内や佐野常民などは、後に合水堂にも入門していて、ほかにも両塾に在籍した多数の門人がいることがわかった。「適塾」で蘭学、蘭医学を学んだ後、より実践的な華岡流外科医療を学んだものと考えられる。

両塾生は伝えられているほどに仲が悪かったということではなく、〝良きライバル〟としてお互いを認め合っていたと考えるべきであろう。

「適塾」とともにわが国の医学の発展に寄与した「合水堂」を顕彰するため、中之島の東洋陶磁美術館の南側の緑地に、石碑が建立されています。近くにお出かけの際は立ち寄り、この地で若き塾生たちが研鑽を積んでいたことに思いを馳せてはいかがでしょうか。



合水堂顕彰碑全景。横幅１．８メートルの大きな石碑です。